

あまる・のこる

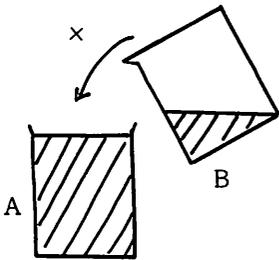
樫井文代

1. はじめに

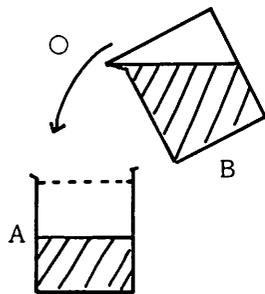
- (1) カップに 液体が あまる。
- (2) カップに 液体が のこる。

上の例文を比較すると、カップの中に液体が存在するという状態をあらわしている点で一致する。(1)と(2)は置きかえが可能である。しかし、状況の違いによって使い分けが認められる。

(図 I)



(図 II)



カップAに液体を満たすことを目的としてカップBから注入すると仮定すると、図Iの場合(Aにこれ以上注入する余地がない場合)は、(1)(2)両方のいい方が可能であるが、図IIの場合(Aにまだ注入する余地がある場合)は、(2)のいい方は可能だが、(1)のいい方はできない。このように常に両者の置きかえができるわけではない。

そこで、ここではこの二語をとりあげて分析を行ない、意味の違いを考えてみることにする。なお、国立国語研究所1964では、「あまる」は「2.158増減」、「のこる」は「2.124残存・消滅」に分類されている。

2. 分析

普通、[Nが あまる/のこる]という構文をとる。

- (3) お金が あまる。
- (4) お金が のこる。
- (5) 太郎が あまる。
- (6) 太郎が のこる。

カ格には、(3)(4)のように無生物がたつ場合と、(5)(6)のように有生物がたつ場合がある。有生物がカ格にたつ場合、人間や動物などの意志が関係することがある(2.2.で述べる)ので、無生物と分けて分析を行なうことにする。

2.1. N=無生物の場合

まず、「あまる」「のこる」の言いかえが可能な例文から取りあげることにする。

- (7) 食べきれずに おかずが あまる。
- (8) 食べきれずに おかずが のこる。

上の例文は、両者ともおかずが食べられる量以上にあったために食べられなかった量がある状態、つまり全体の一部分が存在している状態である。

- (9) こづかいが 三千元 あまる。
- (10) こづかいが 三千元 のこる。

こづかいが最初一万円あった場合、七千円使った結果、三千元がまだ手元にある状態である。(9)の場合には三千元がこれ以上使い途がない金額であるというニュアンスを持っている。

- (11) 試験の時間が あまっている。
- (12) 試験の時間が のこっている。

(11)(12)の例文も全体の一部分が存在している状態である。しかし、すべての問題を解きおえた場合には(11)の方が適当であり、まだ解答していない問題がある場合には(12)の方が適当であろう。

- (13) チケットが あまっている。
- (14) チケットが のこっている。

まだチケットが売れる可能性があれば(14)、これ以上売れないとすれば(13)の方が適当であろう。

このように置きかえが可能である場合でもニュアンスの差が生じる。以上の例文においては、全体の数量の一部分についての表現であり、数量の対比に共通性がみられる。しかし、「あまる」には、食欲や購買力などの最大限度を超えた場合に不必要なものとして存在しているという意味合いを含む。「のこる」は、行為の結果として全体の量のうちなくならなかった部分が引き続き存在する場合に用いられるといえそうである。

- (15) 10を3で割ると 3が立って 1あまる。
- (16) 10を3で割ると 3が立って 1のこる。

割り算で端数が生じることについても「あまる」「のこる」が用いられるが、「あまる」の方が一般的である。これは、端数という割りきれない部分についての表現であるためであろう。

次に、両者の言いかえができない例文を取りあげてみる。

- (17) *やけどの傷が あまる。
 (18) やけどの傷が のこる。
 (19) *果実のしみが あまる。
 (20) 果実のしみが のこる。
 (21) *未練が あまる。
 (22) 未練が のこる。
 (23) *しこりが あまる。
 (24) しこりが のこる。
 (25) *悪名が 後世に あまる。
 (26) 悪名が 後世に のこる。

いずれも「のこる」しかいえない。(18)はやけどをした結果として傷が皮膚にある状態である。(20)は衣服類に果実の汁をつけた結果、しみとして後がついてとれない状態といえる。(22)(24)は何らかの行為の結果、心の中にその事についての思いが存在している状態といえる。(26)は死んだ後までも名前が悪業とともに引き続き伝えられる状態である。これらの例文に共通していることは、ある作用・行為が行なわれた結果、やけど、果実の汁、心中の思い、悪業が、傷、しみ、未練、しこり、悪名になりかわって引き続き存在している状態をあらわしていることである。そこには時間経過や環境変化がはたらいており、それらの要因によって何らかの質的变化があらわれている。

- (27) 遺産が あまる。
 (28) 遺産が のこる。

この例文は両方正しいが、意味的にかかなりの違いを生じる。(27)は「遺産を遺族に振り分けた結果、はんばが生じる」の意であり、相当する遺族に分配すべき金額が基準となっており、その基準を超過した金額についての表現である。(28)は「生前に使われなかった財産が遺産として死後に存在する」の意であり、死によって財産が遺産へと質的变化をする。

2.2. N = 有生物の場合

- (29) *私が 帰らないで あります。
 (30) 私が 帰らないで のこります。
 (31) *太郎が 図書館に あまって 勉強している。
 (32) 太郎が 図書館に のこって 勉強している。
 (33) *母鳥が 巣に あまって 卵をあたためる。
 (34) 母鳥が 巣に のこって 卵をあたためる。

このように主体的な行為を表わす文では、「あまる」を用いることはできない。この場合の「のこる」は、「人間および動物の意志によってあとにとどまる・残留する」の意として使用される。

- (35) 三人の中で 私が あまる。

- (36) 三人の中で 私が のこる。

この例文を本人の意志で残留するの意として解釈するならば、(36)しかいえない。しかし、仮に次のような状況を設定してみる。三人いて将棋をさすことにした。一人参加できないのでジャンケンで見学する者を決めることにした結果、ジャンケンで負けたのが自分であったとすれば(35)(36)の両方いえる。このように本人の意志とは無関係な場合には、「あまる」も「のこる」も使える。

2.3. 基準

「あまる」の場合、必要量および予定量・最大限度が基準とされる。「のこる」の場合、時間経過や環境変化の中で「のこる」と判断・認定する時点が基準となる。

- (37) 旅費が あまっている。
 (38) 旅費が のこっている。

上の例文をA君が二万円の予算で五日間旅行に行ったという状況で考えてみる。三日目までに一万円使ったと仮定すると、

- (39) *旅費が 一万円 あまっている。
 (40) 旅費が 一万円 のこっている。
 となる。A君が五日間の旅行を終えた時に、使わなかったお金が二千元手元にあった場合には、
 (41) 旅費が 二千元 あまっている。
 (42) 旅費が 二千元 のこっている。

のように両方のいい方ができる。

この場合、旅行の必要経費は一万八千円であるから、「あまる」の文ではこれが唯一の基準であり、この基準は不動のものである。よって(41)はいえるが(39)はおかしい。(38)は、使っていないお金が一万円あっても二千元あってもいずれの場合でもいえる。ここでは金額は問題にならない。認定の時点はどこにとるかによって、旅費がどれだけ手元にあるかが変化する。(40)(42)は両方とも「のこっている」状態だが、基準となる時点が異なっている。「のこる」の場合は基準を移動させることが可能である。

次に基準以後の量について考えてみる。

- (43) 百枚のコンサートチケットが 十枚 売れずに あまった。
 (44) *コンサートが中止になり チケットが 百枚全部 あまった。

(43)の基準は、チケットが最大限に売れた枚数である。百枚のうち九十枚売れたのだから十枚が「あまる」ことになる。(44)はチケットを売る必要がないのだから基

準は考えられない。「あまる」においては、ある特定の場合に基準は一つだけであり、「あまる」量も決まっている。

「のこる」の場合、基準のとり方によって「のこる」量が決まる。一般に基準以前と以後の量を対比すると、

基準以前の量>基準以後の量……④

である。つまり、時間経過や環境変化とともにもとの量が減少し、減少した量をもとの量から差し引いた量のみが存在する。しかし、時間経過や環境変化があつたにもかかわらず、もとの量が減少しないで基準をすぎてもそのまま全部存在し続ける場合がある。

基準以前の量=基準以後の量……⑤

具体的な例文をあげてみる。

(45) 風が吹いて 花が 一つだけ のこっている。④

(46) 風が吹いたが 花は (一つも散らず)全部のこっている。⑤

(47) きのうちもらったおかしが 半分 のこっている。④

(48) きのうちもらったおかしが 手つかずでのこっている。⑤

2.4. 慣用的用法

「あまる」の慣用的用法には、

(49) 身に あまる 光栄だ。

(50) この仕事は むずかしすぎて 手に あまる。

(51) 人目に あまる ふるまいだ。

(52) 勢いあまって 行きすぎた。

などがある。(49)(50)は能力以上の光栄・仕事がある場合、(51)は許容を超えたふるまいを見た場合、(52)は止まるつ

もりが勢いにつきすぎて通りこした場合であり、いずれも一定の基準を超過したことをあらわす表現である。この用法は他に「十指にあまる」「言葉にあまる」「思案にあまる」「有りあまる」「思いあまる」などがある。

(53) 火事で 一件だけ 焼けのこった。

(54) 商品が 売れのこる。

(55) 戦災で 生きのこった。

(53)~(55)の例文の複合動詞は、「焼けずにのこる」、「売れずにのこる」、「死なずにのこる」の意味である。「消えのこる」「居のこる」なども同様に考えられる。いずれも基準の時点をすぎても引き続き存在している状態を表わしている。

このように、慣用的用法についてもこれまでの分析通り考えられる。

3. まとめ

以上みてきたように、「あまる」と「のこる」の置きかえが可能な場合とそうでない場合がある。慣用的用法を除いては「あまる」が使えて「のこる」が使えない例文はみあたらない。置きかえができない場合には質的变化が認められる。置きかえが可能な場合でも、基本的には意味のとらえ方に差がある。

「あまる」一定の基準量(最大限度)を超過した状態

「のこる」基準の時点で引き続き存在している状態。

言語経歴：1960年12月富山県富山市生 0~
18歳富山市 18歳~東京都大田区

ふる・ゆする

岩崎 宏子

1. はじめに

この二語は、ともに国研1964「2.1511揺れ、振れ」に分類されている語で互いに類似した意味を持つ。しかし、対象となるものや動かし方は必ずしも同じではないので、実際の動作は、かなり異なる。分析を通して、それらの違いを明らかにしていきたい。

2. 物体を動かす場合

2.1 対象物

(1) 体温計を ふって 水銀を 下げる。

(2) *体温計を ゆすって 水銀を 下げる。

(3) 旗を ふって 危険を 知らせる。

(4) *旗を ゆすって 危険を 知らせる。

(5) 試験管を ふる。

(6) *試験管を ゆする。

(7) 鈴を ふる。

(8) *鈴を ゆする。

(9) お姫様が 打出小槌を ふると 一寸法師は 大きくなった。

(10) *お姫様が 打出小槌を ゆすると 一寸法師は